

風・心を感じる街づくり

１．はじめに

「街づくり」・永年、障害者運動にボランティアとして係わっている立場から考えてみたい。私は聴覚障害者に対しての手話通訳活動を続けている。昭和４５年、福岡県に手話の会というものがない頃に始め３５年の月日がたった。聴覚障害者と交流する中で気づいたこと、社会・学校・家庭教育も併せて・・・。

３年前、県内の聴覚障害者２０人とヨーロッパを旅行したおりに感じたこと。それは建物に凹凸が少ないこと。縦の凹凸ではなく横の壁面が新旧建替えても見事に揃っていた。さらにドイツは色が落ち着いた茶色に統一されていた（濃淡はあるけれど）日本のように看板もなく、もちろんネオンもなく旅行者として歩いていて、風を感じることが出来た。ガイド曰く、市政として建物を建てる時の許可に色についても指示があるとのこと。日本にも京都にその趣を感じることはあるけれど・・・。

２．障害者にやさしいバリアフリーを

私たちの住む県内の建物（キャナル・リバーウォーク・アクロス等）１つ１つを見るとすばらしいデザイン・奇抜な色使いを見ることがあるけれど、決して心が落ち着かないと思うのは私だけだろうか。一体感がないのである。

さて日本でのバリアフリーを考えてみると、まだまだ名ばかりのような気がする。障害者もさまざまで、肢体・視覚・聴覚障害、さらに内部疾患・知的障害等と多岐にわたるのである。よってバリアフリーに対する要望も障害によってさまざまであり、例えば車椅子利用者の場合、歩道の段差を無くして欲しい、低くして欲しいと思うし、視覚障害の場合は段差がないと歩道と道路の差がわからない。ＪＲなどは階段の多いことで有名であり障害者泣かせである。自分で行きたいところに自由に行けないというのは悲しいことである。ＪＲの障害者用トイレにはカギがかかっていることが多い（過去にシンナー吸引者や浮浪者がいたためらしい）私が介助をしていた時にも障害者が用を足そうとしてドアが開かず、駅長室まで走ってカギを借りたことが数回ある。駅長がいればいはいけれど不在ならもっと時間がかかるのである。しかし、何故障害者用トイレを設置しているのか、みんなで考えてほしい。今まで、外に出たくても安心して利用できるトイレがなかったからこそ設置されたのである。やはり利用者のための理解が欲しい。そして、考えて欲しいのである。あの未曾有の阪神大震災のおり私たちも災害支援手話ボランティアとして応援に駆けつけ

た。しかし、食料・水・支援物資の配給等の情報は音声でなされることが多く、聴覚障害者の場合、避難場所の小学校の体育館で、たくさん人が並んでいるのを視覚でとらえて、配給だろうと思い一緒に並んで待っていると、それはトイレの順番待ちであったという悲しい笑い話もあったのである。また、車椅子の人たちは、トイレを使用する時、抱えて介助しても学校はほとんど和式で狭いために、利用できずに困っていた。やはりこれからは公共機関や学校など、トイレは和式・洋式、両方考えて欲しい。

また事故や自然災害で列車が遅れた場合など、電光掲示板で情報が流れたら聴覚障害者は助かるし、バスも行く先が表示されれば安心して乗れる。初めての土地に行く場合はなおさらである。聴覚障害者にとっては、とても不便である。情報・コミュニケーション障害の立場から考えると配慮が欲しい。せめて新設される施設には、緊急時における視覚的表示（火災等を知らせるランプ・電光掲示板）が欲しい。聴覚障害者関係で言えば、去年、京都府から土地・建物、無償提供され全国の仲間が募金活動をして、見事に聴覚障害者の使いやすい内容に改善された手話研修センターは、一度、見学して欲しい、いや利用してほしいものである。

障害者は特別な人間ではなく、これを読んでいる人でも、いつどこで事故や病気で障害をもつかわからないし、また妊婦もしかり、ケガ・病気で骨折した場合は一時的障害者となるのである。人間とは勝手なもので、不便さがその時だけわかる。しかし、喉元すざればなんとやらで元気になれば不便を忘れてしまうのも正直なところである。また誰しも歳をとり目も耳も悪くなるものである。いまや障害者福祉は高齢者福祉の分野に組み込まれていることを考えると、いずれ「来る道・通る道」なのである。いつまでも自分が若くて元気だと思っていると、気がつかないうちに体力は衰える。だからこそ、誰もが使える・誰もが利用できる道路・施設づくりが急がれるのである。昨今、道を歩いていても放置自転車が多いので、視覚障害の人たちは白杖で歩いていてもぶつかるし、スーパーなどは階段や通路にダンボールを重ねてあり通れない。駐車場も障害者専用と表示されていても、本来使用すべき障害者の車のスペースに健常者が平気で駐車する世の中、せっかくのバリアフリーが泣いている。ほんの少しの心の余裕、心配りで利用できれば嬉しい。

3．障害者の声、コミュニケーション

建物や施設を作る時、バリアフリーの言葉だけが先行することなく、必ず利用者の声を聞くことをお願いしたい。せっかく建物を作っても、本来使いたい利用者が使えないという声をよく聞く。これは障害を持った人たちだけの話ではなく、高齢者も同じなのである。

またヨーロッパやアメリカ・カナダの旅行のおりに気がついたのは、障害者に対しての自然な扱いである。私の外国旅行は、心許せる聴覚障害者の仲間たちと一緒に旅行であり

手話通訳兼である。現地では、外国語をガイドが日本語に通訳し、さらに私が手話通訳をするわけで二重通訳の不便さを痛感する。いつもながら英語が、フランス語が、ドイツ語が話せたらどんなにいいだろうと思うことしきりの旅となる。

外国ではホテルでもレストランでも観光地であっても、聴覚障害者や手話通訳に対して、振り向かれることもなく、ましてや奇異な目で見られることもないのである。本当に心が楽で自然なのである。宗教観の違いなのかどうか、家庭教育・学校教育の大切さを痛感させられた。これも外国に行ってみないとわからないし、比較材料があつてこそ初めて知った教育の重みである。またカナダで思ったのは、テレビ放送のほとんどに字幕がついていることだ。日本は、長い間のろうあ運動の成果としてNHKが努力をみせているけれど、民間放送はまだまだである。カナダの通訳に聞いたところ、多国籍の人々が多く、言語獲得のためにも字幕は欠かせないというのである。これは、聴覚障害者にかぎらず健聴者にとっても必要なことなのである。

4．さいごに

手話通訳も聴覚障害者だけが必要としているのではなく、聴覚障害者とコミュニケーションを必要としている人たちにとっても必要なのである。公的機関、例えば病院等に配置されれば、医療従事者側からも対人援助活動として喜ばれると思う。現在、筑豊の飯塚病院や田川市民病院には手話通訳者が配置されている。おかげで、聴覚障害者の来院は確実に増えているのも事実である。お互いが助かること忘れてはいけない。

どこか一つ、建物の凹凸をなくし、色を統一した市、いや町を作ってみませんか。障害者に優しい街づくりは高齢者にも、そして一般の人々にも優しいことまちがいないのだから。

私はいつも思う。逆の立場にたって考えてみることを。自分がされて嫌なこと困ることは、相手も同じなのである。忘れてはいけないこと、それは心の凹凸をなくすことである。建物の凹凸をなくすと同時に・・・また、冷たい風ではなく、さわやかな風を自然な風を感じたいと思うのは私だけだろうか。

ボランティアという言葉は聞いていて、きれいなイメージがあるけれど、現実はなかなかハードな世界であり活動だと思う。私は、この「ボランティア」という言葉を使わなくてもいい時代がきつくとくと信じている。

以 上